

ダリアを飾って いつものまちを見直そう！

宇陀松山華小路実行委員会 [奈良県宇陀市]

.....

テーマ まちへの気づきと 参加のシステムづくり

.....

活動の概要
地元の特産品であるダリアについて学ぶとともに、路地に飾るためのデザイン募集等を経て、多くの参加者によって路地をダリアで飾り、地域の活性化を目指した。

.....

設立年月 2009年8月
メンバー数 20人
代表者名 田川 陽子
連絡先 田川 陽子
tel 090-6904-8091
e-mail trees-45@eos.ocn.ne.jp
URL <http://cha-nomisuke.blog.ocn.ne.jp/udasengen/>

.....

わたしたちについて

ダリアの花を路地に敷き詰める環境芸術系イベント、宇陀松山華小路を実施するためにつくられた組織です。

.....

活動に至った理由や背景

奈良県東部の山間部にある国の重要伝統的建造物群保存地区、宇陀市松山。平成18年に選定されたばかりの、知る人ぞ知る歴史的町並みです。ここは、平成8年から町並みライトアップを行う等、町並みの魅力発信を地道に重ねていた土地柄でもあります。

宇陀松山華小路実行委員会は平成21年8月に、この宇陀松山で産声を上げました。この町並みに暮らす市民が、ひょんなことから「奈良県がダリアの球根生産日本一を誇っている上、その大部分を宇陀市の生産者が支えている」という事実を知り、おなじ市内の歴史的町並みでダリアをアピールするイベントを開催しようと動いたことが、きっかけでした。

その内容はシンプルで、自分たちで産地へ赴き、摘んできたダリアの花を歴史的雰囲気の漂う路地に敷き詰めて愛でる。イベントが終わったら欲しい人に花を配って、もとの路地に戻そう、というものです。

初めての取り組みであるため、慎重を期して自分ができる範囲で小さくまとめてイベントを実施しましたが、近畿一円および関東から、様々な方の参加がありました。また、予想を大きく上回る絶賛、とくに女性から、次回参加を望む声を多数頂きました。

前述の通り、宇陀市松山では20年以上前から歴史を活かしたまちづくりが行われていますが、そこに女性の姿はほとんど見えず、どうしたら女性がまちづくりに加わってくれるのか、と悩んできました。このイベントに女性が嬉々として加われる要素があるならば、それらを明確化した上で、女性が参加しやすいまちづくりのあり方を組立てられるのではないかと考えたのです。

そこで平成22年は、予算的な理由で叶わなかつた規模の拡大と、より多くの方の参加を促していくこうと考えました。活動の時間帯、団体の維持・拡大の仕組み等、試行錯誤を重ねて、毎年の恒例行事を自立した運営で行うこと目標とし、自分たちの町の魅力を継続的に発信する、生産者の営みや特産品が生みだされる過程に触れる道筋を確立しようと動いた一年でした。

ダリアについて学ぶ

7月31日「ダリアを知ろう♪入門編」と題し、県緑化フェア推進室より講師を招聘。ダリアは原産地中南米からヨーロッパ、陸路・海路の長い道のりを経て江戸時代に日本へと入ってきたことや、多種多様な花の種類、栽培に適した環境、育て方のコツ、現在の生産者が行っているウイルス対策のためのバイオテクノロジー導入のお話等のレクチャーを受けました。

ダリアの基本的な知識と、栽培の今を知る上で大変参考になり、これらのことと踏まえて花に触れられることで、花に対する意識にも変化ができる予感がしました。

冷涼な気候の宇陀で、ダリア栽培が根付いた理由もよくわかりました。この基本的な知識を学ぶことは、イベントの準備を行う段階で毎年必ず取り入れたい取り組みとなりそうです。



朝、圃場で摘んできたダリアを下絵に沿って並べる。最終的な詰めは現場で判断。地元の人、来訪者、入り乱れての作業。それぞれのブロックに自然発生的に監督役が出現しました。



テープに沿い枠線を描く作業 下絵完成

圃場でダリアを摘む

緑はヒノキ葉

中庭の装飾

宇陀松山華小路の舞台となる宇陀松山は、「日本書紀」に登場する薬狩りの場として知られ、江戸時代も薬種問屋や小売の薬屋が軒を連ね、享保14年に開かれた民間の薬草園が今も町の中に残っているという、薬草とは縁の深い町です。そこで、ダリアの花を並べる前段階で、もう少し薬草の町を印象づける活動を行ってはどうか、というアイデアが出されました。

プランターの材料は地元の材木屋さんで用立て、作り手は毎週第3土曜日に活動しているボランティア協会の皆さんにお願いしました。このボランティア協会では、町の緑化運動の一環としてプランターの配布をされているとのことで、快く作業を引き受け下さいました。植える薬草は、秋に花や実がつくものを中心に19種類。ご近所の薬草博士で知られる方が、薬草園やご自宅の畠で採れたものを分けて下さいました。

9月18日(土)、うだ・アニマルパークに集合。日除けのテントの下で手分けをして、組み立てる人、プランターに苗を植える人、に分かれました。午前中ではほぼ組み立て作業が終わり、午後は色塗り。プランターはシンプルですが、歴史的町並みに馴染む色・形をしており予想以上に好評を博しました。

植えた薬草は根付くまでの1週間、アニマルパークの裏の日陰で水やり等の管理をし、後日希望する家に配布をする、という形をとりました。

宇陀松山を花で飾る取り組み

昨年は時間の制限があつたために、実行委員会でデザインを決めざるを得なかつたのですが、今年は是非とも公募をしたい、という実行委員会の想いがありました。春から準備を始め、中高生・一般からの図案募集を行いました。まず「広報うだ」5月号にて募集告知を行い、6月の最初の締切日の応募総数7通。選考できるほどの数ではなく、再募集を行うことになりました。

小中学校に告知するため教育委員会に相談をしたところ、教育長より地元大宇陀小学校の美術担当教員をご紹介いただき、協力を仰ぎました。大宇陀高校には美術部および美術の授業が存在せず、別ルートでの募集に切り替えましたが、これは実りませんでした。

7月、地元自治会長にイベント・ボランティア・デザイン募集告知を配布し、町内会での回覧を依頼。市内の学校には返信用封筒を添えて再度郵送。

8月の登校日後に締め切りを延期したところ、いくつかの学校からご応募を頂きました。知人友人筋にもデザイン応募を依頼しました。

そして8月。苦労の甲斐あり、39通の応募が来ました。花卉組合、地元自治会、地元NPO、教育委員会(美術担当の先生)、実行委員会の代表がそれぞれ絵を審査、合計10点の作品を展開することに決まりました。デザインモチーフは、花が多いのが印象に残りました。

9月下旬、宇陀松山華小路の会場となる路地の通行止めを行うため、道路管理者(市)、警察と協議し、車両通行止めの許可申請を提出。10月上旬、道路使用の承認が下りました。会場となる路地は狭いうえ車の通行が極端に少なく、迂回路が近くに何本もあるため、この点では特に指摘もなく、スムーズに手続きができます。

10月、「広報うだ」に作品応募の御礼、イベント告知、ボランティア募集の記事を掲載しました。ミニコミ「宇陀のはな」でも同様の記事を掲載。ボランティア希望者の受付開始、当日の段取りを花卉組合と相談し、交流会会場、町並みギャラリー石景庵と料理内容の打合せ。地元ならではの食材を使った料理の提供をお願いしました。いよいよ本番に向けての準備が整いました。

同時期に、宇陀松山華小路実行委員会オリジナル図書カードを作成。昨年の写真を使ったものを10点作り、作品の入賞者に記念品として進呈しました。評判は上々。多めに作成してお土産用に販売してもよかつたのでは、と思うほどでした。



平成22年度のチラシ。ビジュアル的にインパクトがあり、どこでもすぐに品切れに。合成ではなくて実際のものだと説明をしたので、誰もが驚いていました。

10月16日(土)～17日(日)は、宇陀松山華小路の本番。事前申し込みのあったボランティア12名と共に、生産農家の圃場まで花を摘みに行きました。最初に花卉組合から畠での注意事項説明があり、あとはひたすら花摘み作業。朝8時半から取り掛かり、8000花全てを摘み終わったのは、14時頃でした。この作業には、もう少し人手が必要だと痛感しました。

途中から会場で花並べをするため、5名が後発組と入れ替わり、会場準備に向かいました。10時から集めた花を路面に割り振り、下絵に沿って並べる作業を始めました。こちらでは地元の方がどこからともなくやってきて、一緒に作業を始める現象があり。加えて偶然来訪した見学者も花並べに参加し、大人数でわいわいガヤガヤと作業を進めました。14時、作業を終えた花摘み班が大輪をたくさん持ち帰った時には、会場の人々から歓声が上がりました。

花並べは、公募したデザイン画を見ながら行う作業です。花の都合でデザイン画通りにはならない絵もありましたが、どうにか全てを完成させました。暗くなり始めてから照明を点灯し、夜の散歩をする地元の人たちにも楽しんでもらいました。交代で2時間毎に花の水やりを行い、管理にも努めています。

17日早朝、写真を撮影するのはこの時間帯が最も良。人が少なく、光線が柔らかく、花に露がついで絵になるのです。しん、と静まり返った歴史的な町並みの中で、花と町並みと向き合えるひとときです。10時過ぎには、新聞を見た、友だちから聞いた、チラシを見てきた、という方が徐々に増え、会場が賑わってきました。



イベントを閉じる前に、今回の華小路の拠点となつた町並みギャラリー石景庵にて、クロージングコンサートを開催しました。リコーダーデュオ「うたの笛物語」の演奏にあわせて、童謡や懐かしのメロディ、アニメソング等多様なラインナップを参加者全員で合唱。ダリアで飾られた舞台に、演奏者も参加者も気持ちが上向きとなり、大変な盛り上がりを見せました。

コンサートが終わった後、ダリアの持ち帰りを解禁。買い物袋、手提げ袋、近所の人はポールやバットやコンテナを持参し、持てて帰る花を選んでおりました。偶然居合わせた来訪者にも、地元の方が家からあまりモノの袋を出してきては渡す、という微笑ましい光景が見られ、ぬくもりのある交流があちこちで生まれたようです。

相当数が希望者の手に渡ったにも関わらず、花が余つたので撤収作業を行いました。並べる作業は相当時間がかかったのですが、撤収は16時に開始し、16時30分には終わりました。近隣の方が各自筆、チリトリを持って現場に現れ、慣れた手つきでささっと現場を旧状へと戻していきます。花ならべ開始から公開、撤収に至るまで、必ず地域のだれかが見守って下さり、来訪者をもてなして下さっていました。また、人手のいる作業には家族総出で応援をして下さいました。このイベントは、地元のご理解と絶大なるご支援があつてこそ、無事に終えることができたのでした。

希望者にもらわれた花たちは、各家庭でそれぞれ第3の人生を歩むことになりました。例えば、商店の場合は店先で水鉢にダリアを浮かべたものと一緒に飾ったり、ディスプレイに花が活用されておりました。

一般家庭では入り口脇にバットを使った「ブチ華小路」を展開している家もありました。バットを持ってきた理由はこれか、と後で納得したのでした。

クロージングライブ、市内で活動しているリコーダーデュオ、うたの笛物語。華やかな舞台に演奏側のテンションも上昇。

地域づくりの担い手を育てる取り組み

この活動を通じて、関わった人がどのように地域づくりと関係できたかを考察します。

デザイン画の応募者は、宇陀市に関連する物事をあれこれイメージし、絵にしていったとみられます。市内の小中学校からの応募では、身近にある題材をモチーフにしたものが多く、市外・県外からの応募では、市のシンボル的なもの、神話に登場するモチーフを採用する等、若干傾向が違うことがわかりました。

応募下さった39名の方が、宇陀市をイメージさせることを考えてくださったことを嬉しく思うとともに、市内・市外では捉えるものに若干のずれがあることを認識できたのは収穫でした。

直接イベントに関わって下さった花摘みボランティアの参加者は、地元8名、市外から3名、県外から1名。花摘み作業で打ち解け、お互い話が弾むようになった様子で、当イベントで知り合い、イベント以降も交流が続いている方もみられました。花が縁となり、地元の方と市外の方との交流が生まれたため、狙い通りの効果が得られました。

花摘みボランティアの参加者は、20代男性～70代女性まで、4:6の男女比でした。一方、花並べにはたくさんの方が飛び入り参加され、狭い路地にギッシリの人だかりで、人数を把握できない程の賑わいを見せっていました。こちらの参加も女性が圧倒的に多く、遠巻きに見ていた男性に話を聞くと、女性たちの怪気炎に押されて中に入ることをためらったとのことです。

花並べでは10か所に絵を展開しましたが、各コーナーに自然発生的に現場監督が現れ、それぞれの場所で、初対面の人同士にも関わらず、監督に相談しながら協力して絵を作っている様子がほほえましく思いました。参加した方からは、下絵にあわせて花を置く作業は、塗り絵のようで楽しいとのご感想も頂いています。楽しみながら、各自の創意工夫で魅力的な場づくりが出来た様子は、地域づくりの上で理想的な状態だと思いました。

現場の管理体制、花の輸送体制等、いくつか運営面での問題は見えましたが、回数を重ねる毎に改善を試み、より充実したイベントへと成長させていきたいです。



ダリア持ち帰り解禁



軽く水に浸す



よってたかって媒染



媒染中です



ドキドキしながら解く



オリジナルバッグ完成!



ダリアの花は、町並みのあちこちに散っており、どこにもらわれていったのかは全て把握しきれませんでしたが、「あの家も」「この家も」と宝探しが一週間ほど楽しめました。

今年初めて、大きなコンテナを持ってきていた方がいたのですが、その方のコンテナが町の中に置かれ、「たくさんお持ち帰り下さい」というメッセージが入れてありました。イベント翌日以降に町を訪れた方に、お裾わけをするためにたくさん持つて帰つておられたのです。ここにも、もてなしの心をみてとることができました。

10月末、旧森野薬草園にて薬草茶の振る舞いを予定していましたが、台風来襲のため、やむなく中止。前の週に会場のお掃除をただけで終わつてしましました。この取り組みは来年以降の楽しみとして先へ送ることになりました。

月が改まり11月、宇陀松山華小路で撤去したダリアの花びらを使った染物教室を開催。地元から5名、市外から2名の方が参加。残念ながら手ほどきを依頼するはずだった講師の方の都合がつかず、事前に実行委員会が全体の流れのレクチャーを受けに行き、当日実施へと至りました。

路地から撤去したダリアのうち、赤と黄の花びらをもぎ、袋詰めにして冷凍したものをダリア染め教室に利用。前日から水と一緒に鍋に入れて汁を出す、という仕込みを行い、実行委員会で用意した手提げ袋、巾着袋の他、各自持参した布を染まりやすく蛋白処理を施してから教室を始めました。

各自ビー玉や割り箸、輪ゴムを使って絞り等の模様を作り、水に湿らせます。花びらを煮出した液に布を漬け、10分ほど置いて水洗い。媒染剤に数分浸して発色させ、再び水洗い。これを2回繰り返し、絞りを解いて広げ、乾燥させれば完成。

意図的にデザインしたものを作るのではなく、素人なので予想もつかない絞り模様が偶発的にできるのが面白く、広げてみると思いのほか力作揃いで、参加者全員が満足の面持ちで家に帰ることができました。

エピソード

デザイン公募では、予想に反して応募数が少なかつたです。再度募集をかけると同時に、地元小中学校には返信用の封筒を同封して発送したのですが、あとあと話を聞くと、初めてのことでのんなものをイメージしたらよいかわからなかったとのこと。同じお題で来年も募集があれば、出したい図柄がある、と複数の方から言われました。

また、今年の夏は猛暑となり、ダリアの生育が悪かったため、花の供給面での不安がありました。しかし、生産者の努力により無事花を貰うことができ、安堵しました。中には、当イベントのために大輪のダリアを確保して下さった農家もあり、実行委員一同感激した次第です。

当初は、イベントの数を少なめに設定していたのですが、実行委員会や周囲の提案により、イベントそのものにふくらみができたことは嬉しい誤算でした。結果的にキャバオーバーとなつたのですが、その中でボランティア協会やうだ・アニマルパークとの連携など、今後の活動において、協力者が得られたことは前進です。

薬草茶の振る舞いは、地区内にある薬草園で活用されずにいる近代和風の茶室、「知止荘」の活用モデル提案として急遽行うことになったのですが、台風来襲のため結局実施はされていません。

行政との連携については、今回はなかなか人員が確保できずやむなく見送ったのですが、県（宇陀土木事務所）が積極的な支援を買って出て下さり、駐車場の確保や車に対する表示看板の設置、記者クラブへの投げ込み等、実行委員会では気づかない点のフォローや広域に向けての発信を担つて下さいました。奈良県とは、絶妙なバランスで協働ができたように思っています。



花を使って花を表現する、シュールな作業。花の種類を工夫して並べ、実際に近づけていく。多種多様なダリアだからこそできるのかもしれません。



今後の予定

宇陀松山華小路が目指す方向

女性が参加しやすいまちづくり活動を!という願いと、奈良県が誇るダリア球根生産をもっと盛り上げよう!という想いが交錯して生まれた「宇陀松山華小路」ですが、実際に活動を行い、見えてくる課題があります。

例えば、女性が参加しやすい、に焦点を当てると、それは活動できる時間帯が限られていること（午前半日、午後半日、夕方以降は難）や、家庭の状況によって出られない、という事態があることでした。そこで、集まる時間帯やボランティア活動の時間の区切りに工夫をしたこと、参加しやすくなつたと言われたことは前進です。

この地域の女性はしっかり者が多く、テキバキ物事をこなしていく力を持っているのですが、まちづくりの輪に入つてこない理由がそこにあると気づきが得られたので、さらに参加しやすい環境をつくるために必要な目標が少し見えた気がします。

ダリアの产地が抱える問題にも直面しました。生産者の高齢化、休耕地の増加、鹿やイノシシによる生々しい被害。球根生産量日本一を維持するには、これからが正念場を迎えることが素人にもわかります。ダリアの需要を底上げし、若い人が希望をもって仕事に就ける状況を作ることも大切だ、と実感しました。

宇陀松山華小路は、ダリアなしには続けることができません。イベントそのものの運営スキルを向上させることも大切ですが、市民がダリアに関心と誇りを持ち、生産者が元気になれて、産業が振興していくことにも力を入れなければならぬと思っています。まだ、その解決策は見当たらぬ、当面手探りが続いていますが、このイベントが回を重ねるごとにダリア業界が明るくなるよう、心掛けたいと思っています。